

TICAD7公式サイドイベント UHC:アフリカの未来!

~日本とアフリカの未来に対する対話と学び~



甲南女子大学教授・大阪大学名誉教授

中村 安秀

東京大学医学部卒業。インドネシア、パキスタンにて家族連れで暮らす。ケニアとカメルーンの母子手帳プログラムに携わる。2018年より日本WHO協会理事長。



創価大学看護学部

小松 法子

青年海外協力隊でタンザニアの母子保健クリニックで活動した事をきっかけに、中村安秀教授の下で学び、母子手帳国際会議には事務局として関わっている。

TICAD 7とは

アフリカ開発会議 (Tokyo International Conference on African Development : TICAD) は、1993年から日本政府が主導し、国連や国連開発計画 (UNDP)、アフリカ連合委員会、世界銀行と共同で開催している国際会議です (外務省ホームページ)。現在は、3年ごとに日本とアフリカで交互に開催され、アフリカ各国の首脳、国際機関、国際NGO、アフリカで活動する企業などが参加しています。日本では6年ぶりとなる第7回アフリカ開発会議 (TICAD7) が2019年8月28日から30日の3日間、パシフィコ横浜で開催されました。「アフリカに躍進を! ひと、技術イノベーションで。」のテーマのもと、

アフリカ内外から1万人以上の参加があり、アフリカの経済・社会・平和と安定の3つの柱について議論されました。

UHC:アフリカの未来! 日本とアフリカの 未来に対する対話と学び

TICAD7では、150以上の様々なテーマのサイドイベントが開催されました。今回私たちは、日本WHO協会とサラヤ株式会社が共催した公式サイドイベント「UHC:アフリカの未来! 日本とアフリカの未来に対する対話と学び」に参加しました。このイベントはサブサハラアフリカにおけるユニバーサル・ヘルス・カバレッジ (UHC) に関わる様々な活動事例を通して、アフリカの未来に向けた対話とするとともに、日本におい

ても持続可能な開発目標 (SDGs) への真の理解への一助となるような学びの機会にしていきたいとの思いで開催されました。活動事例として、医療関連感染予防プロジェクトやヘルスポランティア活動、母子手帳による母子保健活動、小学校での栄養改善プロジェクトなどを取りあげました。企業、大学、国際機関、NPOと立場の異なる登壇者から、アフリカに対する熱い思いとともに、アフリカの人々と取り組んできた活動の成果を含めて発表が行われました。

イベントは、日本WHO協会中村安秀理事長の開催の挨拶から始まりました。ソマリランドの女性医師との出会いについて紹介し、SDGsのスローガン「No one Left Behind (誰一人取り残さない)」になぞらえて、「No Country Left Behind (どの国も取り残さない)」が必要ではないかと提唱しました。ソマリランドは、人口390万人。ソマリアとは別の独立国家であるにも関わらず、国際機関から国として認められていないため、地図にも国際機関の報告書にも出ていません。乳幼児死亡率は71 (出生1000対)、妊産婦死亡率は1300 (出生10万対) という驚くほど高い死亡率ですが、保健人材の不足や保健医療に対する予算が政府予算のわずか3%しかあてられていません。UHCの実現のためには、政府の保健予算を含めた深刻な保健システムの課題がある現状を報告しました。



日本WHO協会中村安秀理事長の開催の挨拶 「No Country Left Behind (どの国も取り残さない)」ソマリランドの紹介

更家 悠介さん

ウガンダの医療衛生とユニセフ支援

サラヤが2010年からユニセフの支援を通じてウガンダで取り組んでいる手洗い啓発プロジェクト(100万人の手洗いプロジェクト)についての紹介がありました。2011年にはウガンダにサラヤ現地法人を設立し、ウガンダ製アルコール手指消毒剤「AlsoftV」他の製造をはじめ、東アフリカでの医療施設でのアルコール手指消毒推進の事業を進めています。さらに、現在、スナノミ(寄生虫)を駆除するためのローションの開発や個人が簡易に心電測定でき、測定したデータがAI解析され、遠隔で心臓の状態が把握可能なモバイル心電図の開発と活用について紹介され、病気の予防や早期発見ができる取り組みを行っていることが発表されました。



*イベントの様子は、動画配信されています。QRコードを読み取るとアクセスができます。



安田 直史さん

タンザニアのヘルスボランティア

ユニセフタンザニア事務所に赴任されていた時に取組まれた、コミュニティーヘルスボランティアの活用について、ヘルスボランティアの役割や歴史的な背景、現在の状況が発表されました。2015年に行われたヘルスワーカーの現状について調査した結果では、小学校卒業レベルの人が多く、年齢層は35歳以上の人が多く、10年以上前に教育を受けてヘルスワーカーとして働いている人が多かったです。今、UHC達成のためにはコミュニティーヘルスの充実が必要であり、ヘルスボランティアの育成等に取り組むことの重要性を強調されました。



*イベントの様子は、動画配信されています。QRコードを読み取るとアクセスができます。

小松 法子さん

アフリカで広がる母子手帳を使った母子保健サービス

青年海外協力隊としてタンザニアに赴任していた時の経験を通して、母子保健における父親の役割について調査を行った研究結果を発表しました。協力隊時代、母子保健クリニックで活動中に日本で使われているような母子手帳が海外で使われていないことに驚きました。日本に帰国後、海外で日本の母子手帳をその国の状況に合わせて活用している国があることを知って、さらに驚いた経験を紹介しました。アフリカで初めて開催された第8回母子手帳国際会議（ケニア）、3年後の第9回母子手帳国際会議（カメルーン）の様子や2018年に行われた第11回母子手帳国際会議で発表された母子手帳の役割や活用した結果・効果を発表しました。最後に、2020年オランダで行われる第12回母子手帳国際会議について紹介しました。



*イベントの様子は、動画配信されています。QRコードを読み取るとアクセスができます。



藤井 千江美さん

シエラレオネの小学校で取り組む栄養改善

JICA 専門家として3年間赴任していた母子保健指標が世界でも最下位に属するシエラレオネのカンビア県で、2019年4月に立ち上げたプロジェクトについて発表されました。このプロジェクトは将来を担っていく子どもたちが、食と栄養の大切さを知り、自らの手で持続した栄養改善を行っていきけるようなしくみを作ることを目的としています。4月に5ヶ所の小学校の校庭に、教師と児童が野菜と一緒にモリンガの木を栽培する「モリンガ・スクールガーデン」を作り、今後は世界食糧計画（WFP）と連携して、WFPが実施している学校給食に収穫された野菜と微量栄養素を多く含むモリンガ葉を加えていくことが説明されました。発表では、モリンガのこと、そしてモリンガと取り組む女性雇用支援を目的としたブルキナファソでの活動も紹介されました。



*イベントの様子は、動画配信されています。QRコードを読み取るとアクセスができます。

おわりに

今回のイベントでは、18時からという遅い時間にもかかわらず、実際にお子さんを育てているお母さんや小学生、小学校の先生、研究者など、様々な方が参加されていました。発表者も企業や国際機関、大学、NGOと様々な立場から、それぞれ取り組んでいる活動やアフリカへの思いを発表しました。その後、参加者の方々と交えて活発な質疑応答が行われ、横浜市の小学校教員の方から、「子どもたちは喜んで募金活動をしているが、実際に現場でどのような活動が行われているか、よくわかって本当に良かった」といった趣旨の発言をいただきました。

アフリカ開発会議も規模が大きくなると、市民との連携が薄くなっていく傾向は否めません。今後も、TICADのような場に積極的に参加し、国際保健医療協力の実際の姿を、市民とともに語り合うことの大切さを改めて実感しました。そういう努力が、これからのアフリカの発展やUHC達成に繋がっていくことを期待したいと思います。



発表者が登壇し、質疑応答の様子

表1 TICADの開催年・開催場所

	開催年	開催場所	テーマ
第1回	1993年	東京	
第2回	1998年	東京	アフリカの貧困削減と世界経済への統合
第3回	2003年	東京	
第4回	2008年	横浜	元気なアフリカを目指して—希望と機会の大陸
第5回	2013年	横浜	躍動するアフリカと手を携えて
第6回	2016年	ケニア・ナイロビ	
第7回	2019年	横浜	アフリカに躍進を！ひと、技術イノベーションで

開会の挨拶と質疑応答も Youtube にて配信しております。QRコードを読み取るとアクセスできます。



開会の挨拶(中村 安秀先生)



質疑応答